



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

5.回天編〈上〉

ALPHAOLITS

柳内たくみ

Takumi Yanai

アルファライト文庫



主な登場人物

Main Characters



シャムロック・ハ・エリック

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



メイベル・フォーン

亜神ロウリとの戦いに敗れ、
神に見捨てられた亜神。
徳島達と行動を共にする。



徳島 甫
とくしま はじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



伊丹 耀司
いたみ ようし

陸上自衛隊一等陸尉。
江田島の要請を受け
再び特地へ赴く。



石原 莞吾
いしはら かんご

中華人民共和国・
人民解放軍総参謀部二部に
雇われた日本人。



オデット・ゼ・
ネヴュラ

翼皇種の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田島 五郎
えだしま ごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

レディ・フレ・バグ 海に浮かぶ国アトランティアの女王。
セスラ メトセラ号の三美姫。三つ目のレンノ種。
イスラ・デ・ピノス シャムロックの秘書。
北条宗祇 北条元総理の息子。若手政治家。
カイピリーニャ・エム・ロイテル ティナエ艦『エイレーン号』艦長。
ドラケド・モヒート アヴィオン海海賊七頭目の一人。
オディール・ゼ・ネヴュラ 漆黒の翼を持つ翼皇種の少女。



シュラ・ノ・
アーチ

帆艇アーチ号船長。
正義の海賊アーチ族。
プリメーラの親友。



プリメーラ・ルナ・
アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺

●ロンデル

帝都●

●イタリカ

◎アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

クンドラン海

●カナテラ諸島

●メギド

アトランティア・ウルース

アヴィオン海

トユマレン

碧海



序

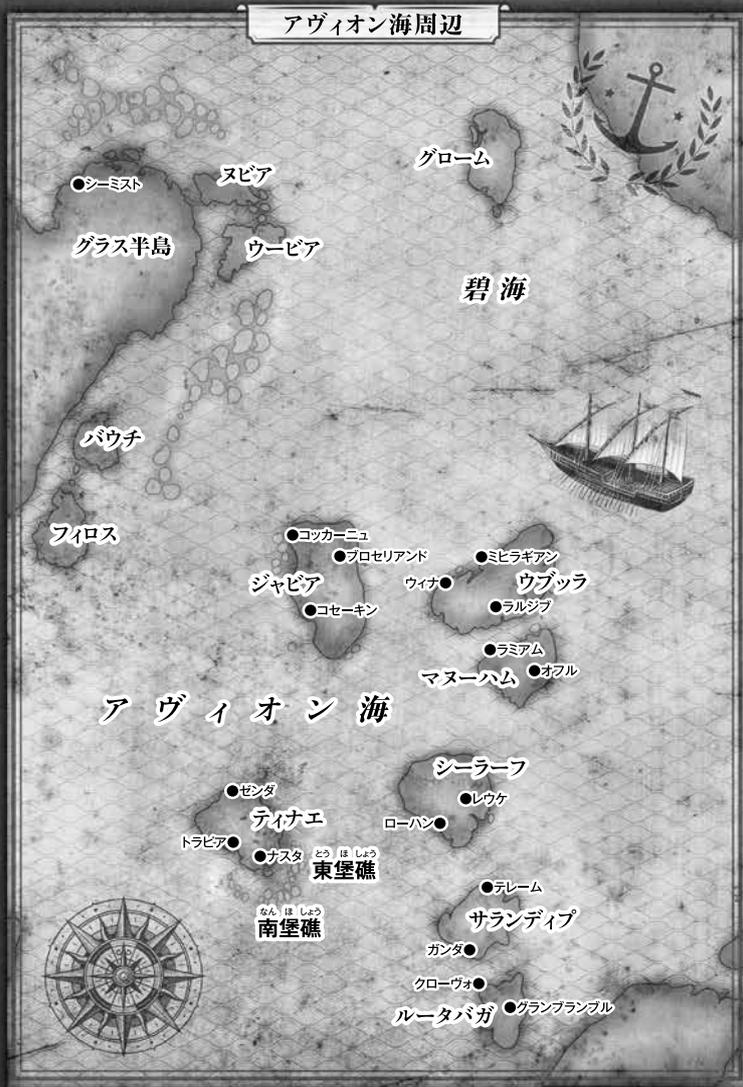
日本国の首相官邸総理執務室には、アメリカ合衆国大統領と直接通話出来るホットラインが設置されている。

昔は通訳を介した音声での通話しか出来なかったが、高速通信網が利用出来るようになった今、モニターに相手の表情を映しながらの会話も当たり前となった。

表情というのは、言葉以上に雄弁だ。感情や思考、弱みや強みといった多くのことがそこに表現される。

もちろん、ベテランの政治家や商売人は、表情を取り繕って本心を隠すことに長けている。とりわけ今の合衆国大統領フランクは、政治家にして商売人でもあるから、心の内を読み取るには大変苦労する相手だった。

しかしそれでも、よくよく観察すれば僅かな変化から読み取れることもある。国内閣総理大臣の高垣周作は、持ち前の繊細さに——言い換えれば臆病さとも言える



が——磨きをかけることで、それを可能としたのである。

『ニホン政府は、特地に新しい領土を得て、派遣する艦艇や戦力も増やそうとしていると聞いた。シユウサク、特地で権益の拡張でも始めるつもりなのかね?』

フランク大統領はモニター越しに高垣の顔を見ると、ニコリと柔和な笑みを浮かべた。だが高垣の目には、フランクの腹黒い欲望の蛇影へびかげがとぐるを巻き、「ニホンが新たな市場と資源を獲得したならば、自由競争の市場としてもつばら米国に開放されなければならぬ。シユウサク。イエスと言え! さあ、さあ、さあ!」と叫んでいる姿が映っていた。

「い、いえ! 権益の拡大などいつの時代の話でしょうか? 私どもは帝国側の要望に基づいて等価交換をしただけです」

高垣は英語を解す。しかしながら即答せず、通訳の字幕表示を待つてから答えた。

『等価交換? ほほう、シユウサクは猫の額ねだまほどの土地と、良質な海底資源を有する島嶼しまとを交換することを等価と呼ぶのかね?』

「そのように感じるのは我々の価値観だけで物事を見えてしまうからです。猫の額と言っても帝国に住まう人々にとっては大切なモニュメント。その価値を諭さとえるならば——そう、イスラエルの人々にとっての『嘆きの壁』と考えるといいかもしれません。それに

良質な海底資源を得たといっても、ボーリング調査をした訳ではありません。地下資源においては、前評判こそよかったけれど、実際に掘ってみたら中身はさっぱりで大損した、というのもよく聞く話です」

高垣は冷や汗を流しながら言い訳した。

その際、フランクに分かりやすい喩えを交せる試みもした。

フランク大統領は家族や側近にユダヤ系を抱える。そのためか以前からイスラエルの鼠肩ねずみかたが過ぎる傾向があるのだ。

しかし反撃の舌鋒ぜつぽうを浴びせても、フランクの眉はびくりとも動かなかった。きつと東の現状なんてまったく気にしていないからだろう。

フランク大統領といえば、乱暴な言動で世間に知られている。しかしよくよく見ていると、その発言の裏には冷徹な計算があるのが透けてくる。中東政策については、バランスを取ろうなどと思うとぐらぐら揺れ動いて煩わづらわされる。最初から一方に偏ってしまったほうが、かえって落ち着くとも考えているに違いない。

どうせ中近東ムスリム達からの嫌悪感けんあくかんは、数値にしたら九九九九と既にカンスト状態。これ以上悪くなりようがない。ならば中立を気取って、双方から『味方してくれなかつた』と憎まれるより、イスラエルから最上位の好意を得たほうが遙かにマシというのも

外交政策としては間違っていない。

『なるほどな。だが、ギンザ事件以来、ニホンは羨ましいほどの幸運を得続けているじゃないか。油田の件もきつといい結果を得るさ』

「幸運？」

不注意から発したのだろうが、フランク大統領のこの言葉には、さすがの高垣も湧き上がる不快感を抑えるのに苦労した。銀座事件では、彼の親戚が亡くなっていたからだ。「フランク。貴方は一連の出来事を幸運と仰った。しかし銀座事件という最大の不幸の埋め合わせには、まだまだ不足しています。我が国にとつても、そして私個人にとつてもね……」

高垣はこれまでに降りかかってきた多くの不幸を、小さな幸運を集めて紡いでどうにか埋め合せている真つ最中だと返した。幸運を黒字、不幸を赤字とするならば、日本の貸借対照表は未だに真つ赤つかなのだと。

『すまない、言葉遊びを間違った。君はあの事件で家族を亡くしていたな……』

「謝罪は不要です。ただ、今回領土となったカナデーラ諸島は、アルヌスから遙か遠くであることをご理解いただきました。現地は戦国時代ともいうべき動乱の渦中にあり、タンカーを安全に走らせることも難しい。今回得た資源で利益を上げられるほどの油送

が出来るのは、かなり先のこととなるでしょう。もし、今すぐにそれをしようとするな

ら、貴国が中東や世界各地で払っている以上の資金と人材を現地に投入しなければなりません。今、我が国にはそれほどの余力はない」

すると、フランク大統領はフンと鼻を鳴らした。

『それならばよいのだが……』

「一体何を心配なさっているのです？」

『ニホンは大きな市場と有望な資源の双方を手に入れた。そうなると私は不安に駆られるのだ。貴国がしち面倒くさい国際協調やら我が国との同盟関係に重きを置かなくなってしまうのではないか、とね？』

「先代の大統領がそのような態度でらつしやいましたな。目に見える表向きの平和にこだわって軍事力を示す手を弛めたばかりに、世界は各地で動乱に包まれた。『戦争は平和主義者が起こす』と言ったのは、確かチャーチルでしたかな？」

『奴の後始末には未だに苦労させられているよ。ノーベル平和賞なんて受けるからこうなった。「自分はいざとなったら核兵器のボタンを押すかもしれない存在だ。もし賞をくれると言うのなら、任期を無事に終えてからにして欲しい」——そう言って断るべきだったのだ』

「彼はいい人間になりたかったのでしょう。あるいはいい人だと人々から思われたかったのか」

『それをジエガノフに見透かされたから、酷いことになった。——それでシユウサク、私はまだ答えてもらってないぞ』

フランクはロシア大統領の名前を出し、溜息交じりに告げた。

「答えとは？」

『言つたろ？ 私は二ホンがこれからどうするつもりなのか気を揉んでいると。世界の安定を維持するには、我が国の力だけでは不足だ。台頭するチャイナを抑え込み、アジアの秩序を維持するには、経済力一位と三位がともに手を取って協力しなければ。同盟関係とは、いわば長年連れ添った夫婦のようなもの。倦怠期をどう乗り越えるかが重要だ』

「仰る通りです。妻がふとしたことをきっかけに婚姻関係を続けるべきかと悩み始めるなんてことは、洋の東西を問わず起り得ることですからね。そこに思いを馳せられるということは、大統領ご自身も経験がおありですか？ まさかファーストレイディが……」

「それはよかったです。是非とも家庭円満の秘訣を教えてください」

『記念日を忘れず、ちゃんと愛の言葉を贈ることだ。それとプレゼントも必要かもしれない』

「おおつ、確かにそれだけのことをしてもらえれば、奥様も平和な家庭を揺るがそうとは思わないでしょうな。同盟関係もそれと同じです。親密な関係に甘えず相手を思いやって丁寧に接しなければなりません。古き時代の夫婦関係がごとく、相手から奉仕されることを当たり前と考えているようでは見放されてしまうでしょう」

『我が国は長きにわたり二ホンを守ってきた。これは長年の奉仕とは考えられないかね？ 君はそれを当たり前だと思ひ込んでいないかね？』

「残念なことですが、大統領、昨今では、長きにわたって養ってきた守ってきたという我々男の想いは女性には通じません。それらは婚姻関係上当然のことであり、恩恵とはみなされないので。もしそれを口にしたら、その瞬間に家事労働の対価を給金という形で求められかねません。夫の側としては、これまで住まわせてやった分の家賃と光熱費を求め返すという手もありますが——そのような言い合いを始めてしまったら、もう家庭内は全面的な戦争状態に陥るでしょう。そいつったことには触れないことが大切です」

『その通りだ』

フランクは微笑んだ。

「とはいえ、大統領がご心配するには及びません。我が国は周辺のバランスを激変させるような国家戦略の変更は予定しておりません。何しろ巨大な隣人がいて、なかなか大人しくしてくれません。あの国は我が国に求めるものがあるようで、今も片手を私どもの内懐深くに突っ込んでいます」

『もしかして「彼の地」にかね?』

「現地で起きている戦乱にも一枚噛んでいるようです。おかげでせっかく得られた新領土のカナデーラ諸島の周辺も、波高しといった有り様です」

『助けが必要かね? 我が国としては、助力を惜しまないつもりだよ』

当然ながら基地用地と安定的な輸送路の提供が必須となるが、と大統領は続ける。

「ご厚意には感謝いたしますが、特地のほうは我が国の力でもどうにかなりません。問題はこれが東シナ海の状況と連動したものに见えることです。貴国が協力してくださいのなら、そちらへの対処にお力添えを願いたい」

東シナ海か——と大統領は嘆息した。

『随分とキナ臭くなってきたとは私も報告を受けている。しかし、そこまでとは考えていなかったな。ホンコンに集まりつつある抗議運動の漁船団も、軍の動きと連動してる

のなら、ニホンとしても何らかのリアクションを起こす必要がある。どうだろう? 特

地に戦力を振り分けるのを控えては。急ぐ必要がないのなら情勢を見定めてからでもよいのでは?』

「いえ、そうも言ってられません。こちらのアナリストの分析では、特地の不安定化は隣国の工作員が指喉したもののようです。この状況を看過しては、事態はますます悪化して手が付けられなくなるでしょう。早め早めの手当が必要になるのです」

『そのために東シナ海へ振り分ける戦力が不足してしまつた訳か。だから前から言っていたじゃないか。ニホンは軍事力を増強すべきだと』

「その件では私も頭を悩ませています。少子高齢化が進む日本では、予算を増やしたからと言って簡単に戦力は増えないのです」

『で、君は私に何をどうして欲しいのかね?』

「第七艦隊を、東シナ海に差し向けていただきたい。そうすれば、日米の結束の固さを示すことになり、中国も過激な手段を取ることを躊躇うでしょう」

『君の意向は理解した。では、我が国に何が出来るか、早速ブレン達と検討する』

すぐに好意的な返事をもらええると思っていた高垣は、フランク大統領の態度に眉根を寄せた。

「……」

『我々にも少しばかり時間が必要なのだ。何をどの程度行うか——慎重に検討したい』
「分かりました、大統領。よい返事をお待ちしております」

高垣はフランクと会話を締めくくる挨拶を交わす。そして互いに息を合わせたように、通話終了のアイコンをクリックしたのだった。

アメリカ合衆国／ホワイトハウス大統領執務室

「諸君、我々としてはこの事態にどう対処すべきかね？」

日本国総理大臣との電話会談を終えたフランクは、スタッフ達を見渡した。大統領執務室には首席のオスカーと次席のジェシーら補佐官達、それとマスターソン国務長官、更に統合参謀本部議長のイドリフ將軍らが居並んでいた。

「チャイナの動きは、我々にとって好都合ですわね」

次席補佐官のジェシーが、長い金髪を掻き上げ、才気走った笑みを浮かべつつその理由を語った。

日本は単独では中国に抗し得ない。つまりアメリカの要望に——もっぱら貿易に関する交渉の場面のだが——日本が譲歩する必要性が出てくるのだ、と。

「とはいえ無茶な要求をし過ぎると、二ホン^{ニホン}をチャイナ側に追いやることになるよ」
調子に乗り気味の次席補佐官に対し、首席補佐官オスカーが警告を発した。

中国の一路政策、ロシアのシベリア開発や北方領土問題といった部分で日本が交渉を進展させるのは、水面下でアメリカが日本に過剰な要求をほのめかした時だ。日本としてアメリカにべつたりな存在ではないぞと示してくるのだ。

それだけにあれやこれやと欲をかいてはならず、ほどほどでなければならぬというのがオスカーの意見だ。

「ええ、分かっていますわ」

それでもジェシーは止まらない。得られる利益は、根こそぎ掻き集めるべきだと主張した。

アメリカも選挙で成り立っているからには、政治家は利益を掴み取って国内の企業、ひいては有権者に分け与えなければならぬ。大統領として不動の権力を有している訳ではなく全ては国民の支持があつてこそ。そしてアメリカの民衆は貪欲なのだ。

するとフランク大統領は言った。

「繰り返しになるが、私としては二ホンが特地にかまけるようになって、こちらのごとに手を抜くようになるのは避けたいんだ」

どの国も外交では、『利益を独占し、損は他国に押しつけること』を指す。もちろん実際には不可能だから『出来る限り損を他人に負担させ、利益は可能な限り自分に集中させる』ところで落ち着く。ただその割合や分かち合い方が国によって異なるのだ。

アメリカ合衆国の、そしてフランス大統領の場合はそれが露骨であった。

東アジアの、特に膨張する中国を抑え込む役目は日本に押しつける。そして日本が救いを求めてきたら恩を売りながら助ける。それが基本的態度だ。そうすれば軍事費を削減出来るし、日本に武器を大量に買わせることが出来るから国内の軍事産業も大喜びなのだ。

従って『この状況は好都合』というジェシーの意見には、フランスも賛成であった。

更に言うと、得られる利益は根こそぎ掻き集めろという彼女の基本姿勢もまた、フランスの商売人としてのポリシーに合致する。だからこそフランスは彼女を高く評価していた。

「大統領、やり過ぎは禍根を生みます」

ところが首席補佐官のオスカーは、それはよくないと言った。

「分かっているよ。チャイナが二ホンと手を組んでしまうと言うんだらう？」

國務長官のマスターソンは、眉根を寄せ、腕を組みながら唸った。

「二ホンとチャイナはいがみ合っているぞ。その両国が手を組むだなんてこと、起こり得るのか？」

すると首席と次席の補佐官達が、あり得ます、と揃って頷いた。

一瞬、どっちが説明する？ という目配せが飛び、ジェシーが解説を始める。

「チャイナはイデオロギーなど問題にしておりませんのよ。あの国に大切なものは利益、つまりエネルギーと資源の安定的な供給なのです。二ホンがそれさえ約束出来るなら、それまでの諍いすらなかったかのごとく振る舞うことでしょう。そして二ホンは——いえ、二ホンのマスコミは、チャイナの人権問題には無関心です」

オスカーが補足した。

「二ホンは今のところ資源消費国ですが、特地を得てそう遠くない未来には資源輸出国になります。もしチャイナが利益があるとみなせば、二ホンと手を取り合うことは十分考えられるのです」

「そんなことになったら、我々はアジアの権益を一気に失うばかりか安全保障上の危機を迎えてしまうよ」

「だからこそ、対日要求はほどほどに控えねばなりません」
 オスカーは言う。拡大膨張する中国を矢面に押し立てて覇権国家アメリカの暴虐を牽制する。それが前世紀八〇年代の日米貿易摩擦でやり込められ続けた日本の対米戦略なのだ。

しかしマスターソンは言った。

「ならばチャイナに具体的な行動を起こさせてはどうかね？ そうなったら二ホン国民は怒って、政府がチャイナに接近することを許さなくなるはずだ」

「確かにそうだな。いっそのこと今回は艦隊を出さず、様子見してみようか？」

フランク大統領がそう言うて頷くと、オスカー首席補佐官が慌てた。

「いけません。あの海域をチャイナに押さえられますと、オキナワとタイワンが危険に陥ります。極東アジア情勢も激変するでしょう。二ホン人は簡単には動きませんが、一旦動き出すと極端に走る傾向があり、たちまち憲法改正、チャイナとの本格的な軍事対立、更には勢い余って核武装にまで進んでしまう可能性すら——」

「そうなったら東アジアの緊張が一気に高まってしまふ！ 二ホンはそこまで踏み込むか？」

マスターソンの問いにオスカーは重々しく頷いた。

「今までなら不可能でした。しかしこれからの二ホンならば、ないとも限りません——」

「どうしてだね？」

ジェシーが説明を引き継ぐ。

「もし全面核戦争が起きたとしても、特地を攻撃する手段は、チャイナはおろか全世界のどの核保有国にもないからですわ。二ホンに対しては相互確証破壊が機能しないのです。これはとても危険なことで、チャイナとロシアは時とともに猜疑心を強めていくでしょう」

フランクは呻くように言った。

「確かにそれは問題だな……」

「更にチャイナとロシアの態度を硬化させかねない報告が入りましたわ。ザ・ユニバーシティ・オブ・トキオのプロフェッサーであるヨーメーが、『門』現象の科学的再現に成功しました」

「それが何だと言うのかね、ジェシー？ 異世界に通じる『門』は、今でも必要に応じて開閉されているじゃないか？ それが今更何の問題になるのかね？」

フランクにはその重要性が今ひとつ理解できないようだ。マスターソンも首を傾げている。

「これまで『門』の存在がさほど問題視されなかったのは、『門』の場所がギンザとアルヌスに限定されていたから。そして実質的に開閉を担っているのが、政府から独立した団体だったからですわ」

「そうだ。あの団体はニホンに協力的であつても支配を受けていない。まあ、我々からの支配も受け付けないが、誰に対してもそうならば問題とはなるまい？」

「ところが大統領、これからは違つてくるのです。科学的な方法で『門』を再現できるとなつたら、ニホン政府はいつでも自由自在に好きな世界と往来できるようになります。応用の仕方によつては、この世界の任意な場所から任意な場所への瞬間的な移動も可能となりますわ」

「ふむ、保有している航空旅客会社や運輸株を売り払つてしまわなければならんかな？」
 フランクは商売人らしく、まずは物流に大きな変革がもたらされることを想像した。

「それもありますか……」

すると、それまで黙っていた統合参謀本部議長が口を開いた。

「大統領、お気付きになりませんか？ これは弾道ミサイルといった搬送手段を用いず、突如としてクレムリン宮殿やホワイトハウスの大統領執務室に、核爆弾を置いていくことが出来ることを意味しているのです」

オスカーは混ぜっ返すように言った。

「中央銀行の金庫室に繋いで、中の金塊をごっそり奪い去るなんてことも出来ますね」
 核爆弾の喩えよりこちらのほうがフランク大統領には衝撃的だった。

見たことも触つたこともない核爆弾の被害より、空っぽの大金庫のイメージのほうがよほど彼の感性を刺激したからだ。フランクは商売に失敗して破産した経験がある。誰にも打ち明けたことはないが、従業員に給料を支払う日に金庫が空になつていた夢を見て、叫びながら目を覚ましたことも一度や二度ではない。

「大統領、この技術の完成は危険なのです。非常に、とても、著しく……」

「ましてやニホンが核武装するなんてこと、決して許してはなりませんのよ。『門』技術と、核兵器、そして特地、この組み合わせは最悪なんですの」

二人の補佐官の言葉に、フランクは深々と嘆息した。

「そのプロフェッサー・ヨーメーは、多額の資金と地位で誘えばこちらに靡くのか？」

たとえばMIT（マサチューセッツ工科大学）あたりの永年教授職と多額の研究費を約束したら、ヘッドハンティングに応じるか？」

「ヨーメーの人となりについての調査報告によりますと、彼はザ・ユニバーシティ・オブ・トキオの教授職にかなり強い誇りを抱いているようでした——他の地位で勧誘して

も、応じることはないだろうとのことです」

大統領は深く刻まれた額の皺しわを揉んだ。

「つたく、金に靡かない奴つてのはこれだから困る。とはいえ、誘拐したり暗殺したりで解決……ともい坎のよろ？」

「ヨーマーがいなくなれば、研究の進展は多少なりとも遅れるでしょう。しかし一度実験に成功したからには研究が止まることは決してありません。遅かれ早かれ、実現に向かっています」

「うーむ」

オスカ―首席補佐官が右手を挙げ、常識的な手法を提案した。

『門』の危険性を国際問題として提起して、研究を禁止する国際条約を締結するという方法がありますが？」

「いや。『門』研究の問題は公にしたくない。いくら条約で禁止しても、陰で研究を進める国がいる以上、どうにもならん」

実際、ヒトの遺伝子改造を例に挙げると、国際的なルールが設けられ、安易な実験は禁じられている。しかし中国の研究者は、ヒト遺伝子に手を加えた双子の女兒を誕生させてしまった。当然、全世界の研究者達から猛烈に叩かれ、中国政府も慌てて処罰した

と公表したが、その後どうなったかの情報は完全に隠蔽されてまったく伝わってこない。中国には、やれることをやって何が悪いという考え方があるからだろう。法が禁じていても隠せばよく、たとえバレてもしらはつくればよいという態度だ。従って国際法で禁じても陰で研究が進められるのは間違いない。それどころか、禁止すべきだという提案をきっかけに研究を開始しかねない。

対抗するには、アメリカも研究を進めるしかなくなるのだ。

もちろん、アメリカや欧州各国にも、こうした非合法・反倫理的な実験を行う地下組織は存在している。だが、表向きは取り締まらねばならない以上、予算的にも活動的にも規模を抑えざるを得ない。堂々と公費を投入できる中国のほうが圧倒的に有利なのだ。「熾烈しれつな研究合戦が始まってしまいますわね」

結局、アメリカも莫大な予算と人員を投じなければならなくなる。しかも、この技術が完成した後にやってくる世界は大混乱だ。もしかしたらその先には人類にとつてバラ色の世界が訪れるかもしれないが、変革期は悲劇のかつ非人道的な事態に陥るだろう。

「致し方ない……今回の件と合わせて対処することにしよう」
フランク大統領は重々しく言った。

「どういうことですか？」

「オスカーとジェシーは、今回のチャイナの動きを利用してニホン政府とチャイナとの間に決定的な楔くさびを打ち込むことになるようなプランを考えてくれたまえ。ついでに、このヨーメーの件と一緒に解決できるとなおよいな。根本的な解決でなくていい。必要なのは、ある程度の時間稼ぎだ」

「そんな都合のよい方法があるでしょうか？」

マスターソン 国務長官が首を傾げた。

「大丈夫だ。この手のことは、二人の特技だからな。違うかね？」

フランクの無茶ぶりとも言える要求に、オスカーは一瞬息を呑む。

だが、ジェシーは躊躇うことなく前に出た。

「大統領、是非私にやらせてください。外連味けれんみ溢れる良策をご用意いたしますわ」

「ふむ。三日以内に構想を提出してくれたまえ。それを読んでから、各部署に詳細なプランを検討させる」

「かしこまりました」

ジェシーが颯爽さつそうと退出していく。少し遅れて、オスカーも彼女を追うように執務室から出ていったのだった。

01

特別地域／碧海へまかい／カナデーラ諸島

南洋の島を形作る風景といえは、強い日差しと白い砂浜、そしてエメラルド色に輝く海だろう。椰子やしの木と、赤茶けた土も忘れてはいけな。

そんな色彩からなるカナデーラ諸島には、ラワン、マーレット、オルロットの三つの島と、名もなき小さな岩礁がんしゅうの群れがあった。

この島嶼を領有していたのは、大陸の沿岸国の一つゲイキール子爵家。大陸で覇を唱える帝国に服属する諸侯家だ。

記録では、カナデーラ諸島には住民がいないことになっている。しかし人間の姿がまったく見られない訳ではない。海羊うみひつじや海猪うみいのしといった家畜の群れを率いた海洋遊牧民の集団が、アウトリガー付きのカヤックでやってきて、一時的な住み処にすることもあるのだ。

だが、ゲイキール子爵家は、彼らのことに注意を払ったことはない。この島にそれほど利用価値を見出してないからだ。先祖代々、引き継いできた自国の領土目録にその名がある。故に領有を続けてきたに過ぎない。

だからだろう、その島が今どうなっているか気に留めることもなく、宗主国たる帝国の女帝から、求められるまま領有権を差し出した。

対価として彼が得たのは、伯爵への降参だった。帝国宮廷儀礼における序列が、「子」から「伯」へと上昇したことはゲイキール家にとって最高の栄誉なのだ。

そして、海洋遊牧民達もそのことにはまったく無関心、無関係を決め込んでいた。彼らはこの島の主が誰かなんて気にしたことがないのだ。

海洋遊牧民の生活は自由気まま、単純明快だ。

彼らは朝起きると、網を開いて家畜の群れを解き放つ。そして海洋達がエサとなる魚を食べるのを、カヤックを操りながら見守るのだ。

眠くなったら木陰の涼しい所に横たわって眠る。

発情したら適当によい相手を見つけてまぐわい、子を産む。

そして家畜のエサとなる魚が減ったら、また別の海へと移動するため、カヤックに海羊の皮で作った帆を張って島から出るのである。

実に分かりやすい。彼らはそんな牧歌的な毎日の中で産まれ、育ち、死んでいくのだ。ワコナというヒト種の少女と、ウギという海棲種族トリトーの少年が出会ったのもそんな分かりやすい生活があったからだろう。

強い日差しで褐色に焼けた肌を持つワコナと極彩色のウギは、出会ってすぐに意気投合し和気藹々と笑い合って、時々つき合うように喧嘩した。

そうした光景を周囲の大人達は特段の感慨を抱くこともなく、当たり前前の日常として眺めていた。

だがそんな平和も、水平線近くに帆船の群れが姿を見せたことで破られた。

「何だろう？ ワコナ、あれを見て！」

ワコナが膝まで浸かる浜辺で銚もちを手に魚を狙っていた時、海面から顔だけ出していたウギが声を上げた。

一番近くまでやってきたのは、ラティーンセイルを張った帆柱を三本立てた船だ。櫂かいまで有した船の型は、ジーベックと呼ばれる戦闘艦であった。そんな船が何十隻も浮かんでいたのである。

それらの船は帆を下ろすと、短艇なんていを何艘なんそうも海面に下ろそうとしていた。

舷側ぶらなぐの縄梯子をつたって、剣や弓で武装した海兵が乗り移っていく。

それを見たワコナは、胸の奥から湧き上がるざわめきに戸惑った。これまで帆船と出合うなんてことはいくらでもあった。セーリングカヤックで海羊の群れを追っている時に、すれ違って互いに手を振り合うこともあった。海羊の肉が欲しいと頼まれ、鉚や斧といった金属製の道具と引き換えにいくらか渡したことだってある。

なのに今回はどうしてこんなに落ち着かない気分になるのか？

それはきっとこれまでの連中が、ワコナ達に関心を持つことなどなかったからだ。なのに今回に限っては、自分達に向かって近付いてくるのだ。大人数で。鉄の武器で身を固めて。

「あれは海賊だ！ 海賊の人狩りだよ、ワコナ！」

ウギが叫んだ。

「海賊!?」

「そうだ、奴らだ！ 最近の海賊は人間を捕まえるんだ！」

ウギはその光景を大陸の漁村で見かけたことがあると呟いた。

海賊達は少しでも魔導の力を持っている者をパウビーノとすべく、人間を見かけると手当たり次第に捕らえ無理矢理掠^{さら}っていったと言う。

「大変！ みんなに報せなきゃ！」

「分かってる。ワコナ、こっちだ！」

ウギはワコナの手を取ると、水を蹴って走った。

ウギとワコナの報せを聞き、島の人々は海を振り返る。

「みんな逃げろ！」

「でも、どこへ！」

その時には既に短艇の群れは砂浜にまで近付いてきていた。それを見て、みんな我先にと走り出した。

程なくしてラワン島のあちこちで悲鳴が上がった。

短艇を砂浜にまで乗せた海賊達は、剣を抜いて散開すると島に住む人々に襲いかかったのだ。

怒号と喚声^{かんせい}の中で剣刃^{けんじん}が閃^{ひら}き、血臭に満ちた飛沫が舞い上がり白い砂浜に鮮紅色の彩り^{いろ}が加わる。

矢が空気を切り裂いて飛び、逃げ惑う人々の背中に突き刺さった。

あちこちで絹を裂くような声や、絶命の苦悶の声が上がる。

「若い女、男、子供は捕らえろ！ 年寄りはずつ殺せ！」

上陸した海賊達の指揮官が叫ぶ。

殺されずに済んだ者は捕らえられ、手足を数珠繫ぎに拘束されて集められていった。海賊達はこの島で暮らしていた海洋遊牧民に目を付けたらしい。

島には粗末な小屋がある。椰子の葉を屋根にした数時間の労働で作れるような小屋だ。海賊達はそんな小屋も誰か隠れていないかと捜し始めた。

ワコナ達は貝が内包している真珠や、子供が拾って宝物にしそうな寶貝や、儂げな美しさを控えめに主張する桜貝を集めて身を飾る習慣がある。もちろん加工に手間はかけない。自然そのままのそれらに小さな穴を開けヒモを通すくらいだ。それらで男も女も裸の身を飾るのだ。

海賊達はそんなものですら奪った。

「ちっ、しけた島だぜ。こんなものしかないぜ」

「海の生け簀には海羊がいっぱいいますぜ」

「よし、お前達、網を手繰って片っ端から捕まえろ！」

そしてあらかたの物を奪うと、海賊は家屋に火をかけた。青い空と白い雲を背景に、黒い煙が立ち上っていった。

略奪騒ぎもどうにか落ち着いた頃、沖の船から一艘の短艇がやってきた。

波に揺られる短艇には、パリッとした仕立ての艦長服を纏った若い男が背筋をピンと伸ばした姿で乗っていた。

男の名はトラッカー海佐。

トラッカーは短艇が砂浜に乗るのを待つていられないとばかりに、波打ち際で靴が濡れるのも厭わず浜に降り立った。

「ちっ、くそっ……」

その瞬間トラッカーは舌打ちした。

透き通った海面から白い砂がよく見える。今、海に降りても浸かるのはせいぜい踝くらいだろうと思ったのだ。しかし意外にも足首から膝の中ほどまで沈んでしまい、半長靴に海水が侵入を始めた。砂の柔らかさを見誤ったのだ。

だがすぐに気を取り直して意識を島へと向ける。

砂浜には住民達が捕虜として集められていた。

「ふんっ……よくぞまあこんな仕事に熱心になれるもんだ」

白い砂浜を踏みしめて上陸するトラッカーの呟きに、翼人少女の船守りイザベツラが答える。

「しょーがないじゃん。奴隷だって売れば金になるもの。こんな何の旨味もない仕事で

タンマリ稼ごうと思つたら、奴隷狩りしかないでしょう？」

アトランティア・ウルースは海上生活者が群れることよつて形成された集団だ。彼らの多くは海賊稼業に手を染めた経験がある。他人の物を奪うことを悪いとは思わないのだ。

その集団が時を経て大きくなり、今では国家を標榜するようになった。

野卑な海賊気質のままでは外国からの評判がとても悪いと理解すると、一生懸命お行儀をよくして尊敬されるよう身繕いを始めた。しかし元が元だけになかなか改められない。様々な場面で、海賊であつた時の名残を見せてしまう。

「艦長！」

陸が上がつていた海兵達の代表がトラッカーの姿を認めてやつてきた。

「報告いたします。島を占領しました。島にいた奴らも全員捕らえ終わりました」

「一人も逃がしてないだろうな？」

「大丈夫です。全員です」

トラッカーは砂浜に集められたこの島の住民らしき群れへと目をやった。

捕らえられた住人達は座らされて項垂れている。中には恨めしそうな目をトラッカーに向ける者もあつた。

浜や内陸に視線を向けると砂浜のあちこちには死体が散らばつていた。見ると年寄りが多い。若い男女の遺骸も見られたがきつと激しい抵抗をしたのだろう。

「必要以上に痛めつけてないだろうな？ 不必要な怪我をさせてたりしたら、お前らを同じ目に遭わせるぞ！」

「大丈夫です。これから奴らを働かせにやなりませんし、巫人だろうがヒト種だろうが、若くて活きがよければ高く売れるつてことはみんな弁えてますので」

そういう意味じゃないんだが、と言いかけてトラッカーは止めた。

自分の感性がアトランティアの、特に兵士達に共感してもらえないようなものではないと分かつていたし、結果的に捕虜を苦しめないように扱うならそれで構わないからだ。

「おい、この臭いは何だ？」

トラッカーはクンクンと鼻を鳴らす。煙の臭いに肉の焦げる臭いが混じつていた。「きつと家に隠れている奴でもいたんでしょう？」

それに気が付かず家に火を放つたらしい。水兵達が火を消そうと慌てているが完全に火に包まれてしまつてからでは間に合うはずもない。

「ちつ、しょうがねえなあ……」

トラッカーは捕虜達の集まるところまで進むと、顎をしゃくつて部下達に命じた。

「儀式の準備をしろ！」

「はっ！」

トラッকারの部下達は、長い旗竿はたざらを砂浜の中央に据えた。

「女王レディ・フレ・バグ陛下の命めいにより、本日、この瞬間より、カナデーラ諸島はアトランティア・ウルースの神聖不可侵な領土として編入された！」

トラッকারの宣言と同時に、号笛が吹き鳴らされる。

「国旗に敬礼」

兵士達が整列して見守る中、アトランティアの国旗が旗竿のてっぺんに向かって昇っていく。そして昇りきると、トラッカーは敬礼を解いて部下達に告げた。

「よし、全てが終わったことを艦隊の提督にご報告せよ。爾後しご、この島嶼は我がアトランティア海軍近衛艦隊が泊地はくちとして使用する。陸戦隊長は捕虜を役し、早急に要塞の建設を始める！ 我々は艦に戻る」

こうしてトラッカーの率いる艦は、アトランティア・ウルースの版図はんとを広げる尖兵せんべいたる任務を終えたのであった。

「奴ら、行った？」

「ううん、ここに居座る気みたい」

岩陰に隠れて皆の様子を見ていたウギは、自分が間違っていたことを悟った。

「くそっ」

来寇くわうしたのは海賊ではなかった。正しくはアトランティア・ウルース軍であったのだ。しかしそんなことは些細な間違いであって大差はない。海賊であろうとアトランティアの兵士であろうと、この島の平和を破壊し、人々を塗炭とたんの苦しみが待ち受ける奴隷生活へと引きずり込もうとしているのは同じなのだから。

見れば、島に残って捕虜となった人々を無理矢理働かせて何かの建設を始めた。抵抗する者がいたのか、鞭むちや棒で激しく打ち据えている。

「と、父さんと母さんが……。わたし、みんなを助きたい……」

ワコナが泣き始めた。

「とにかく逃げよう。おっさんと子供達を安全なところに逃がさないと……」

ウギとワコナは、幼い子供三人と髭面の初老男性を一人連れていた。両親や親戚から自分達が囨になるから逃がしてくれと託されたのだ。

初老の男性は、船材に掴まって漂流しているとウギが助けた。海で死にかかっている者を助けるのは海で生きる者の習慣なのだ。

とはいえ、それは純粹な善意からの行動ではない。メギド島の例にもあるように、助け出された人間の何人かに一人は、助けられたことに恩義を感じて一族に繁栄をもたらしてくれることがある。彼らの行動はそれを期待してのもの。つまり打算なのだ。

とはいえ全部が全部打算という訳でもなかったりする。

でなければ、自分達を囿こにしてまで初老男性や子供達を逃がそうとするはずがない。彼らは海賊達の狙いが自分達の身柄にあると理解すると、盛大に逃げ回って海賊の耳目を引き寄せた。そんなことが打算だけで出来るはずがない。要するに、打算を名目にした海で生きる者の心意気のようなものだ。

そしてそんな心意気を託された以上、ウギとワコナは無謀な行動に出る訳にはいかない。

ワコナは島の岬に隠してあったアウトリガー付きのカヤックを引っ張り出す。

そしてそれに老人と子供達を次々と乗せ、アトランティアの船が屯たむろする方角とは逆方向に漕ぎ出していったのである。

アトランティア・ウルース

アトランティア海軍近衛艦隊、トラッカー海佐艦長率いるジーベック級軍用帆船イザベツラ号は、大小様々な船舶を連ねて海上都市を形成しているアトランティア・ウルースへと帰還、未明の入港を果たした。

しかし舫もい綱を繋いだからといって一息つくことは出来ない。

舷梯^{せうでい}を渡すと、早速労働力にならない捕虜達を船底から引つ張り出して奴隸商人に引き渡さなければならないし、消耗した水や生鮮食料品を積み込む作業も始めないといけない。海羊の肉も塩漬け加工を施したり売り払ってしまったりする必要がある。

そしてそれらと並行し、アトランティア・ウルースの版図に新たな島嶼を加えたことを報告するため、伝令使を王城船へと向かわせる必要があるのだ。

「では、行け」

「はっ、お任せくださいー」

トラッカーの伝令使として艦長室を飛び出していったのは、見習い士官のカシユ・ノ・フランジェリコであった。少年期から青年期へと移り変わる年頃のカシユは、任された仕事を果たすため足取りも軽く艦長室から出て行った。

「カシユの奴を王城船に行かせたの？」

船守りのイザベツラがカシュと入れ違うようにして艦長室を覗き込み、二、三の必要事項を報告した後の余談という形で尋ねてきた。

「ああ、目をかけてやってくれと頼まれてるんだ」

「それって宰相閣下の口利き？」

「ま、そういうことだ」

作戦成功の報告を王城へともたらず伝令使は、提督や大提督の目に留まりやすい。報告の種類によつては女王直々に声を掛けられることすらある。将来の栄達を夢見る若手にとつては垂涎の役目なのだ。

「大人の世界って大変だね」

プリメーラ・ルナ・アヴィオンを女王に推戴して再興を目指すアヴィオン王国。その宰相に、女王直々の使命を受けたイシハ・ラ・カンゴーは、アトランティア・ウルースの女王レディ陛下からも宰相に任じられ、アトランティアの宰相も兼ねることになった。するとその周囲には、宰相の権勢の恩恵に浴そうと、大臣、貴族、有力者達が次々と群がっている。

イシハは彼らの願いを聞き入れる交換条件として、自分の願い事を叶えてもらったり、美酒美食の宴に招待してもらったり、財貨や宝物、美女の奴隷などを贈ってもらったり、している。有り体に言えば、職権を乱用し、私腹を肥やす汚職まみれな毎日を送っているのだ。

とはいえ、これがこのアトランティアの——否、特地世界の政治の日常でもあった。力なき者は、財貨や宝石、あるいはその他の別な何かを差し出し（差し出すものがないければ、自分の身や働きを対価とし）、力のある者の庇護下に入って寄子となる。力ある者は寄親として彼らを護るのだ。

もし外部勢力と対立したり利益を争う事態となった時は、寄親同士で利害調節をした

り、それが出来ないような時は戦つたりする。もちろん寄子はその戦いに参加する。何だか武士のご恩と奉公、あるいはヤクザの親分子分兄貴舎弟、西洋騎士の君臣関係みたく見えるがその通りだ。洋の東西、時代、世界を問うことなく、似たような関係が形成されるなら、それは知的生命体を作り上げる社会の形態における「基本」なのだろう。

そうしてイシハは、アトランティアの宰相となったことで巨万の富を築くことに成功した。

ただし同時に、絶つてきた寄子の頼み事も一杯抱え込むことになった。その中には、『今度、軍に入ることになった我が息子をよろしく引き立ててやってください』という

ものもあり、それが巡り巡ってトラッカーの元へとやってきたのだ。

というのも、トラッカーを近衛艦隊の艦長職に引き立てたのは宰相のイシハだからである。トラッカーは寄子としてイシハの意向を叶えてやらねばならない。

今回、見習い士官に伝令使の役目を与えたのもそれが理由だ。イシハから送り込まれた見習い士官が女王陛下の前に立つ姿を示すことで、トラッカーはイシハからの頼みをしっかりと叶えているぞと示すことになり、イシハもまた取り巻きとなった有力者に顔を立てることが出来るのだ。

とはいえ、三人の見習い士官の中で誰を選ぶかはトラッカーの自由だ。

「カシユの奴、とっても嬉しそうな顔をしてたよ。自分が選ばれるとは思ってなかったみたい」

「奴は、自分を能なしだと弁えているからな」

「能なしは酷いよ。親の七光りを盾に威張ったり責任逃れをしたり、楽をしたがるあの凸凹コンビよりはよっぽどマシだし」

「ああ、確かにそうだな。奴は意欲があるだけマシなほうだ」

イザベッラ号には、士官見習いの若者が三人乗り込んでいる。だが三人は経験もなければ、役に立つような知識も持っていない。それで艦長のトラッカーの役に立とうと

思ったら、彼らに出来ることは意欲に溢れていることを示すか、付け届けをしてトラッカーの財布を温かくすることくらいだ。

そして、コネでこの世界に入ってくるような連中は、熱意を示すより親の財力に頼って付け届けをして、楽な仕事を割り振ってもらって見習い期間を通り過ぎようとする。もちろん、トラッカーとしてはくれるという物を断ったりはしない。そして貰ったからにはちゃんと楽で責任の少ない仕事を割り振ってやる。とはいえ、トラッカーも自分の船を沈めたり、ドジをやったりして自分の評価を低下させたくはない。下から吸い上げた付け届けを、そのまま上に差し出し自分の評価を上げるという方法もあることにはあるが、それでは格好が付かないのだ。

トラッカーも軍人であるからには、能力で評価されたいという矜持がある。だから部下にも銭金^{ぜなかね}だけでなく能力を差し出すよう求めていた。それすら出来ないような無能者は、せめて意欲だけでも見せよと求めた。するとカシユは、たまたまなのか、あるいは必然か、付け届けではなく熱意を示すことを選んだのである。

カシユは皆が嫌がる仕事を率先して引き受けた。号令でドジリ、信号で失敗して皆から嘲笑され、水兵達から馬鹿にされつつも、しかし確実に経験と知識と力量を向上させていった。

だからこそトラックカーは、カシユを伝令使に選んだのだ。

もし、見習い士官の中からいきなり士官に出世させられる粋が二人分できたとしたら、トラックカーはそれを凸凹コンビに与え、カシユは見習いのまま手元に残すだろう。カシユにとつてそれは不幸なことかもしれないが、トラックカーにとつて、そしてこの船の乗組員達にとつてはそれこそが幸いなのだ。

「でも、このことを知ったら、凸凹が妬くんじやない？」

「別に気にする必要はないさ。俺は日頃から能力や意欲を、付け届けと同等に評価すると言つてあるからな。知つてるか？ 金つて代物も、量が増えると価値が下がるんだぜ」

「みんなが楽しがつて賄賂を差し出してるような時は、一生懸命働いてくれるほうが価値があるつてことだね？」

「そういうこと。俺に差し出せるものが他の奴よりも少ないと思つたら、付け届け額を他の奴より多くするか、意欲的に振る舞うかすればいい。俺は艦長としてこの船のことに責任があるからな。多少の銭金なんかより意欲的なほうがありがたかつたつてことさ」

トラックカーはそう言つて笑つた。

「面白いよ、あんた。悪名高い宰相様の口利きで艦長になつたつて聞いたからさ、一体どれほどの銭ゲバ野郎かと思つてただけど、あんた、なかなか悪くないよ」

イザベツラは気に入つたと言いながら、相好を崩したのだった。

さて――

イザベツラ号に配属された士官候補生カシユ・ノ・フランジェリコは、艦長室を出ると足早に船から降りた。

「おい、カシユ！ どこに行くんだよ？」

埠頭で商人と価格交渉をしている士官に同行していた件の凸凹コンビ――見習い士官のデブとのつぼことバヤンとレグルスの二人は、カシユの姿を目敏く見つけると声を掛けてきた。

この二人はカシユの見習い仲間ではあるが、決して仲がよいとは言えない関係だ。

「艦長から伝令使を言い付かつたんだ！ ちよつと出掛けてくる」

「何でお前が？」

「たまたま二人が忙しかつたからだろ！」

カシユは二人の追及を軽く手を振つて誤魔化すと、そのままその場から離れた。

正直、理由を問われても彼には答えられないからでもあった。

カシユは万事に要領が悪く、艦長への付け届けすら満足に出来ていない。それがために当直なら夜間ばかり、仕事もキツくて汚くて疲れるものばかり割り当てられてきた。ドジも失敗も多く、周囲に迷惑をかけがちで艦長の覚えがめでないとは言えないのだ。それだけに、そんな自分が名誉ある伝令使に任ぜられるとは思ってもみなかった。しかしこうなったからにはちゃんと務めて艦長の信頼に応えねばならない。

「おい、カシユ！」

だがその時である。バヤンとレグルスが追いついてきた。

「何だ二人とも、売買の立ち会いはいいのかい？」

「なあカシユ、艦長から言い付かったそのお遣い役、俺達が代わってやってもいいぞ」
レグルスは足早に進むカシユに追いつくと肩に腕を回した。

細身で長身のレグルスは、カシユより頭一つ高いから肩に腕を回されると上から圧迫される感じになる。

「ダメだよ。艦長は僕にとって……」

「いいからいいから！」

カシユがレグルスの腕を払いのける。するとバヤンがカシユを横から突き飛ばした。

「うわうわっ！」

アトランティア・ウルースは大小様々な船が寄り集まって出来た水上都市だ。

目的とする船に向かうには甲板^{かたは}上の狭い通路を通り、船と船とを繋ぐ舷梯を渡らねばならない。そんな場所です意に横から押されたら、足を踏み外して海に落ちてしまう。

たちまち海面に水柱が上がった。

しばらくして海面に浮かび上がってきたカシユを見下ろしながら、レグルスとバヤンは言った。

「おや、困ったね、我が先輩よ！ そんなびしょびしょな姿では、王城にはとても行けないよな!? その姿で女王^{女王}の前に出たら失礼だ」

「しようがない。お前に代わって俺達が王城船に行つてきてやる」

二人のあまりな言いように、カシユは懸命に立ち泳ぎしながら言い放った。

「酷いぞ、レグルス！ バヤン！」

「礼なんていらぬぞ。これも同僚のよしみだ。後のことは俺達に任せてくれ！」

「そんな!？」

「早く上がれ。風邪引くなよ！」

「待ってよ！ せめて縄梯子を下ろして！」

だが二人は、カシユを海から助けようともせずに行ってしまったのである。

* * *

妓楼船ぎろうせんの朝は遅い。

何しろ妓楼の稼ぎ時は『夜』だ。娼姫との一夜限りの恋を楽しんだ泊まり客は、朝になつて寝ぼけ眼を擦つて疲労で萎なえた足腰を引きずるようにして家路に就くのだ。

おかげで娼姫や従業員達の生活リズムは昼夜逆転——とまではいかなくとも、大幅にずれ込んでしまう。

しかし、である。日本国海上自衛隊二等海曹の徳島甫とくしまはづめは、まだ誰も起きてこない朝の暗い頃から厨房に入り、料理の支度を始めていた。

何のためかと言うと、泊まり客の朝食を作るため。『握り寿司』を出して欲しいという要望に応えるためでもある。

「握り寿司が流行るなんて思いませんでしたね……」

徳島が飯台の酢飯をしゃもじで切りながら呟く。

すると徳島の後ろで大釜の火加減を見ていた江田島五郎えだしまごろう一等海佐が言った。



「いえ、私はこうなってもおかしくないと思ってきましたよ。アトランティアの人々の嗜好はどこか日本人に似ていますし」

海上生活を送るアトランティアの人々は、オリザルという海藻由来の米に似た穀物を、魚のエサなどと蔑まずに普通に食べるのだ。

そして新鮮ならば、魚介類を生で食べることもある。

醤油の代用として使える豆醤（魚醤を作る際、魚と同量の豆を混ぜたもの）というものも存在する。

更にわざわざ似た香草エウトリが大陸にはあつたりする。

ならば酢や酒、糖蜜の類を混ぜて、炊いたオリザルにまぶして酢飯とし、すつたわさびと程よい厚さに切った刺身を載せて、豆醤を付けて食べる握り寿司へと至るのも時間の問題と言えた。

つまり徳島が持ち込まなかったとしても、いずれは誰かが発明したはずなのだ。

しかし、とはいえ、まだ存在していなかった。

握り寿司を受け入れる土壌は出来つつあつたのにまだ存在していない。誰かが天啓を得るのを待つだけの状況であつたのだ。

「そんなタイミングに徳島君が握り寿司を持ち込みました。しかも自然発生したものに

立ち読みサンプル はここまで

付随する欠点も、我が国で数百年の時をかけた試行錯誤によつてオミットされて完成形に至つてます。新しい宰相に気に入られたという物語性の後押しもありますが——その味こそがこの世界の人々を魅了したのですよ」

徳島がこの妓楼船メトセラ号で握り寿司を作つたのは、アヴィオン王国の宰相となつた日本人、石原莞吾（いしはらたかご）を持って成すためであつた。

特地に長くいるという石原は故郷の味に餓えているに違いないと、手に入る食材を使つて心を込めて握つたのだ。

もちろん石原は、久しぶりの日本の味に喜んだ。徳島は美味い美味いと言いながら寿司を食べる石原の姿に、料理人として深い喜びと満足感を得たのである。

だがその時、石原の傍らでお酌をしていた娼姫の一人が首を傾げた。

「宰相様、生の魚がそんなに美味しいのかニヤ？」

その時、石原はツンと鼻に利くわさびのせいか、はたまた故郷への郷愁がそうさせたのか、目を潤ませていた。

娼姫達の多くは貧困家庭出身だ。燃料となる薪を節約しなければならず生の魚を泣く泣く食べた記憶がある。酷い底辺生活の記憶だけに、懐かしさは覚えても、泣くほど美味いという印象はない。それ故、時の宰相が美味い美味いと頰張る「ニギリズシ」への